

人数組附 人数扱

人数組は兵の肝要なものである。人数組が細密であれば、等しく進み、等しく退いて、一伍の人数(≡部隊)が一身のように相離れずして助け合うので、接戦すれば甚だ強い。かつ又、組合せが正しいので、心の赴くままに逃げ落ちることもならず、又敵から紛れ者が入り込む余地も無い。総じて人数組は軍の根本である。日本の軍立てはこの法がないので、すぐに多勢になったり、小勢に散らばったり、混沌としていて不斉一である。このため、戦に勝っていないがらすぐに思いがけなく敗れてしまう例が多い。

新田義貞と足利尊氏が京都で戦った時、足利の軍勢八十万がひかえているところに、義貞の軍勢二千余人が敵勢に紛れて入り、尊氏卿の前後左右に中黒の旗を指上げて、足利殿を追い崩したことも、編伍の法がなかったからである。又、和田勢と楠木勢が敵陣に夜討して引き上げた時、立スグリ、居スグリによって敵の紛れ者を見つけ出して誅したのであった。立スグリ、居スグリをやれたのは和田、楠木だけであるが、編伍が正しければ、一人の紛れ者があっても組毎の仲間同士により明白に分かってしまうので、立スグリ、居スグリの必要さえないのである。編伍の方法を左に記す。

○人数組(≡部隊編制)は伍から始まる。伍は五人組である。基本的な編成法は屋敷の並びから組み立てることである。先ず城下の居住区で相並ぶ五家を一伍と定め、相互に親戚のように朝暮懇ろねんごにするので、遠くから姿を見ても誰か分かり、暗夜に声を聞いても某と分かる。これが五人組の大趣意である。もしも又、諸方からの寄せ集り勢であれば、なおさら組合せを厳密に定めなければならない。

○人数を組上げる(≡部隊を編制する)要領は五人を一伍とし、うち一人が首立とうとりである。

ただし、人数の多少により、三〜四人を一伍とすることもある。又、九人までを一伍とすることもある。小組頭、百人頭の要領もこれに準ぜよ。もつとも全ての士をことごとく騎馬にすることもあり、又首立だけが騎馬で、四人の卒を徒歩にすることもある。皆、大将の考えによるものである。

五つの伍の二十五人を小組とする。頭が一人あり、小組頭と云う。この小組を四つ合わせて、百人組と云う。頭が一人あり、百人頭と云う。この百人組を十も二十も統^すべ預かるのを番頭とも侍大将とも云う。この番頭、侍大将を統率するのが大将である。

さて右のように人数を組上げて(≡部隊を編制して)おき、接戦のときは一伍の卒は首立から離れてはならない。小組二十五人の人数は小組頭からは離れてはならない。百人組の人数は百人頭から離れてはならない。百人頭は番頭、侍大将の旗や馬印を見失わず、縦に横に、進み退きながら付きまとうのである。そこで各頭分の者の危機を見捨てた者は厳罰に処する。このことは軍法の巻に出ていた。さて、敵国を手に入れて逐次に進むときは、敵国の人数(≡部隊)をも我が軍兵に用いることがある。その時は我が人数を敵国の人数と半ばずつ組合せよ。その方法は、敵国の人数を百人ずつ分けて百人頭に渡すようにせよ。百人頭はこれを受取って、その人数を四つに分けて二十五人ずつ、手下の小組頭に渡すのである。小組頭は受取って、自分の手下の五伍を十伍に増やしたり、または一伍五人を十人に変えたりすれば、人数を組合せる手間がかからずに済む。いずれにせよ、人数組(部隊編制)は軍の大本であると心得よ。かつ又、近来の風習として、全ての軍士がそれぞれに思い思いの指小旗さしものを用いている事がある。なるほど総員が指物をすれば、その行列は見事であり、壯観を示すようではあるが、その実は好ましくないことである。その理由は、一には大風に難儀し、二には雨に重くなり、三には草木が茂り覆っている地で動き難い。このような問題があるのだから、指小旗を用いずに全ての軍士は冑印、笠印、袖印等により総相符(≡部隊共通の

目印)を定めるべきである。ただし陪臣はその総印(＝部隊を識別する印)を直参(＝主君に直接仕える家来)と同じものにして、別にどこかに陪臣であることが判るような総印を付けよ。これも又、大将の思うように定めてよい。さて又、一伍の首立は、肩印を付けよ。印は各人の好みに任せよ。四人の人数は右の肩印を目当てに首立を助けて行動せよ。小組頭は総印の他に、何か好むところの別印を付けよ。(小組の)二十五人の人数は、この別印を目当てに小組頭を助けて行動せよ。百人頭は鎧の毛色により印を定め、その上に本大将の隊の旗二本を立てよ。番頭、侍大将は母衣ほろを着て、本大将の隊の旗五本を立並べ、その外に各々の家紋を付けた小幟二本を馬印に用いよ。番頭以上は自分の家紋を付した幟を用いるにせよ、幟の上のほうには本国を記せ。本国を記すとは、仙台ならば「仙」の字を書き、薩摩ならば「薩」の字を書くといったことである。

本大将は家々に伝えている由緒の旗をも用い、又隊の旗十本をも用い、又家紋が付してある旗十本をも用いるのである。右のように人数組を定めておけば、急に人数を分けることがあっても、番頭一人に命じれば、預かりの百人組が幾組あろうとも、その番頭に付き従うのであるから、三百人、五百人を分けるのも番頭一人に命じるだけで済むのである。又、百人二百人を分けるには、百人頭一〜二人に命じれば済むのである。小組を分けることもまた同じである。

○右のように人数を定めておいて、敵と接戦するに至っては、一伍の首立とうとりは四人の真先を駆けて敵に当たれ。小組頭は二十五人の前を攻め懸け、百人頭は百人の前を攻め懸けよ。番頭、侍大将もまた同じである。

○右のように番頭は、百人頭、小組頭等の前を攻め駆けるのが定められた軍法であるが、足場が悪い所、又は全く勝ち目がないことを見切った時は、妄りに野猪流いのししの先駆けをしてはならない。懸かるも引くも時宜によるのである。

○陪臣であれば、それぞれその主人が引きまどめて召し連ねよ。もちろん陪臣も主人と相並んで働くのである。ただし上述したように、総印（＝部隊を識別する印）や甲冑などは直参と同様にするが、別に陪臣の印を着けなければならぬ。

○家中に四〜五十人以上所持している者をあらかじめ選んでおき、これを寄合組と名付け、五人も七人も寄せ集めて一備を立てさせ、陪臣として働かせよ。ただし人数組は上述したところの方法に準じること。もっとも主人毎の好みに応じて騎馬に仕立てようと飛道具にしようとも、思いのままにさせよ。もちろん寄合組を総括して司る頭を一人添えよ。これを寄合頭と云うのである。

ただし陪臣の功績を大将に上申するのは、主人自らが上申してはならない。彼の家中の功績であればこちらから上申し、こちらの家中の功績であれば彼から上申するようにせよ。○右のように人数組を正しくすれば、人数を分けたり合わせたりにするのに手間を取らせず、又敵の紛れ者が入ることもできず、また人員が脱落したり逃げ散ったりすることも難しい。総じて軍の大本は人数組にあるのだから、絶対に忽せにしてはならない。さて、人数組のことを理解したならば、人数を扱う方法を知らなければならぬ。その法を左に記す。

○人数を扱う方法とは何か。先ず軍はいくさ大勢の人を自由自在に使わなければ実現できないことである。日本では人数を使うのに采配か、あるいは掛声で動かすだけである。采配では五〜六百人の少人数は使うことができるが、それ以上の人数を使うのは難しい。ましてや万以上の大軍に至っては、一本の采配をどのように振り回しても行き届かないのであるから、采配により兵を動かすのが良い方法とは云い難い。又、掛声により言い含めようとするれば、武者どよみとなってしまう。武者どよみとは、大勢

が声を上げれば、動揺して何となく騒がしく、備も乱れがちになることである。このように武者どよみとは、大いに忌むべきことである。先ず大人数を使うには、旌旗、金鼓並びに音の異なる鳴物、吹物を製作し、平素の操練で予め慣れさせておく。この旌旗を見ればこの様な動きをせよ、この鳴物を聞けばどの様に動け、ということをよく理解させておき、戦場においてその約束動作を違わないように厳しく教え込むのである。これが人数を使う要法である。大略を知っておく必要があるので、そのやり方の一二を左に記す。兵に将たる者とあれば、それぞれ創意工夫し、考えてどのような定めてもよい。ただ肝要なのは、約束動作に違わないことである。

○人数が攻め懸けるか引くかは、金鼓及び鳴物で伝えよ。分かれるか合するか、並びに敵の有無を伝えるには、旌旗を用いよ。先ず旗本に五色の旗を用意しておいて、物見から東に敵ありとの報告があれば、鐘を鳴らして人数を止め、青色に東の字を描いた旗を指し上げるのである。その時、諸手（各兵士）は鉄砲を一声ずつ発して、承知の旨を大将に知らせよ。赤、白、黒の旗も又、同じ要領で用いる。

青は東、赤は南、
白は西、黒は北、

諸手はこの旗を見て敵がいる方向を知るのである。また、懸かれという合図には、青旗を東に向けて振りながら、太鼓を鳴らすようにせよ。その時には、東組の人数が討って懸かるのである。四方も皆、同じ方法である。

○青旗と赤幡の二本が立てば、東南に敵ありと知れ。三方四方も又、同じ方法である。

右は旌旗、金鼓、鳴物、吹物等により人数を扱う方法の大略である。なお工夫を加えてどのようなでも定めよ。いずれにせよ人数を扱う要領は、軍法と操練とにあるものにして、軍法は又、操練よりも重要であると理解せよ。